東京家政学院大学紀要　第四三号　二〇〇三年　人文・社会科学系　抜刷
（二〇〇三年八月発行）

民間宗教者と地域社会

―武相の徳本行者をめぐって―

西海賢二
渡辺みゆき

東京家政学院大学紀要　第四三号　二〇〇三年

民間宗教者と地域社会

―武相の徳本行者をめぐって―

西海賢二
渡辺みゆき*

一　はじめに

江戸時代の祐天上人・徳本上人らの高僧は人々に宗教的側面だけでなく、難産などの苦痛から逃れるために拝復名号を授与するなど数々の現世利益があったと伝えられている。なかでも祐天上人は福島県磐城周辺特有の「じゃんがら念仏踊り」を創案したといわれ、その前歌に

　盆でば米のめし　おつけでば　茄子汁
　十六ささげのよごしはどうだい

との句があり、盆と正月だけが米の飯と茄子汁、ささげ豆の胡麻和えを食べることができる農民の生活苦を象徴する言葉が歌われているなど、人々の生活に民間宗教者が深く関与していたことが読取れるのである。

二　武相の「相原村」をめぐって

相模・武蔵における徳本の足跡や念仏講の実態については、すでに西海の『漂泊の聖たち―箱根周辺の木食僧―』（岩田書院　一九九五）に、神奈川県全域について一四一基の供養塔を紹介している。なかでも平塚市には二十二基、相模原市には十三基と多くがこの地域に密集していることを紹介している。また東京都町田市域では萩原清高氏の精緻な調査報告と念仏講の実態が、『町田地方史研究　第六号』に紹介されている。しかしそれらの報告は石造物そのものの報告であったり、念仏講の実態に終始しているきらいがある。そこで徳本行者の晩年、文化十四年（一八一七）の教化活動を『徳本行者全集』第一巻の十一月二日から十二月十日までの川越・相模教化のうち、特に十一月十五日より十八日までの「武州八王子宿於大善寺に化益有之」の記載に注目して、この教化活動に馳せ参じた現在の東京都町田市域、神奈川県相模原市域の徳本行者に寄せる思いを、念仏講と供養塔の造立傾向から垣間見た。そこで両相原村に着目した経緯について触れておきたい。最初は単にこの二つの相原を、東京都町田市相原、神奈川県相模原市相原という行政上の境界程度に考えていたが、両地域の徳本六字名号塔及び念仏講に参加する機会を得たことによって信仰が境界を越えるという確信を得た。さらにその延長線上で両相原村における近

世以降の所領体系の変遷、同族集団の変遷「マケ」、地縁集団の変遷「ニワバ」という諸集団の錯綜が信仰集団の機能として展開しているということがある程度筆者の調査及び相模原市教育委員会の調査報告書・町田市立博物館の各種報告書からも読み取ることが可能となったので当地域の徳本念仏講にアプローチすることとなった。

筆者は平成十一年四月、町田市相原町坂下の観音堂において十二年に一度卯の年に行われる御開帳行事に参加する機会に恵まれた。その際相原地区にも平成十年三月まで徳本念仏講が存在していたことが古老たちより紹介され、講組織は消滅したものの同行的な念仏の集まりは現存しているとのことであった。そこで「関東摂化講中名號記　巻二十一」並びに、「同　巻二十二」（『徳本行者全集』第二巻）に当該地域の徳本念仏講に授与された六字名号の掛軸が記載されている。この記載によると、八王子宿滝山大善寺の教化において授与されたものであることがわかる。滝山大善寺において授与された六字名号の掛軸のうち、相原村、現在の町田市相原町並びに相模原市相原の両地域に関係するものを抜き出して見ると以下のようになる。

一、大幅名号　講中　百壱人　相州高座郡相原村
　世話人　三右衛門
　忠蔵
　伴七

一、大幅名号　講中　百廿九人　同国同郡相原村森下
　世話人　八右衛門
　金左衛門
　武右衛門

一、大幅名号　講中　百五十七人　武州多摩郡相原村
　世話人　安左衛門
　善蔵
　甚右衛門

一、大幅名号　講中　三百七十九人　同国下相原中村
　世話人　亀太郎
　与右衛門
　友七
　儀左衛門

一、大幅名号　講中　百二十九人　右同所和田
　世話人　仁兵衛
　丈七

一、大幅名号　講中　百八人　同中相原
　世話人　平左衛門
　藤八
　六兵衛
　文次郎

一、中幅名号　講中　八十五人　同上相原大戸
　世話人　江右衛門
　庄八
　伊兵衛
　義右衛門

資料中にある大幅名号は、講員数一〇〇名以上の場合に授けられ、講員数五十名から一〇〇名までには中幅名号、この資料にはないが、

講員数五十名以下には小幅名号がそれぞれ授けられた。

文化十四年（一八一七）の徳本行者の教化活動によって、相原村における徳本行者への信仰がかなり盛んに行われるようになったとみえ、滝山大善寺の教化において六字名号を受けたにとどまらず、同年十二月に徳本行者が江戸に帰府した後に、徳本行者が逗留していた江戸小石川一行院（現　文京区千石一―十四―十一）に赴いて六字名号の授与を受けた記載も見られる。

一、大幅名号　講中　百七十壱人　　相州相原村
　　世話人　忠蔵
　　重蔵
　　行順
　　市郎右衛門
　　八右衛門

この記載によると武州相原村には八百五十八名、相州相原村には四〇一名もの講員がいたことがわかる。これに相応するように町田市相原と相模原市相原には今日も二基の徳本六字名号塔が確認される。以下にその銘文を紹介する

①町田市相原町　長福禅寺境内

（正面）
南無阿弥陀佛　徳本　（花押）
（台座正面）
當村中
（自然石　１００ｃｍ）

②相模原市相原　相原十字路

（正面）
南無阿弥陀佛　徳本　（花押）
（台座正面）
當村講中
（台座右側面）
文政卯歳（欠）月穀日
（自然石　１１０ｃｍ）

①については紀年銘がないが、②のものと形状が類似しているため恐らく同時期に造立されたものと思われる。

これまで述べてきた事例は、単に町田市相原・相模原市相原の両地区の問題だけではなく、文化十四年の教化活動において徳本行者の巡行経路に沿った地域にも、信仰圏が拡大していったことが造立された石造物などからも読み取ることが可能であろう。

三　相模原市域の徳本教化と六字名号塔をめぐって

前掲したように西海の『漂泊の聖たち』によると武蔵・相模において造立された徳本六字名号塔のうち相模原市域には十三基と平塚市の二十二基に次いで多い。このことは明らかに徳本行者が文化十四年の

十一月に教化のために市域を通過したことに所以するものである。この教化の途中、徳本行者は相模原市内当麻の地に伽藍をようする時宗の総本山格の当麻山無量光寺で教化を行っている。この経緯が『徳本行者全集』一巻の「関東摂化蓮華勝会　巻九」に

霜月十九日大善寺を出立し、相模国江と志さす、折から雨降寒気もつよく未夜深に侍りしかとも、老若男女名残りをおしミ群集する事夥敷、手に挑釘うちかゝけて御駕の前後に附しとふに、五七丁ハ打さゝえ透間もなく打かこミ、高てうちん数十張前後左右に打立て、称名の声もいと高く誠に有かたき事になん侍りぬ、程なく扱山の峠を越へて橋本の里なりし瑞光寺と云へる禅寺にて暫く休足致しぬ、諸人群集する事夥し、程なく爰を立て当麻の里とかや無量光寺とて一遍上人の流れの寺あり、此寺にて斎を致しぬ、寺主大ひに帰依致され化益の義願ひ申されける故、斎後於本堂一座の化益有りけり、本堂ハ云ふに及ハず、境内堂外迄遠近の男女群集し、然ルニ折悪敷雪降り来り寒気も一入強くなりしかとも、本堂勿論の事堂外の輩迄一人も帰るものなく、頭に雪を頂きなから静まり返りて聴受しける、誠ニ有かたき事なりける、斯而勧誡も終しかハ、日もはや暮に及ひけれハ、今宵ハ此寺ニ止宿致しぬ、明れハ十一月廿日雪積りたる雪を踏分けて未明に当麻を出立し、同国の国分村の清水寺にて斎を致しぬ此所に斎前名号石の開眼あり送迎の道俗群集しけれハ、斎後本堂におゐて念仏暫く相勤りぬ、日課作法等有り、程なく此所を出立しあつきの渡りを越へて妻田の村の西福寺へ着侍りぬ、此寺にて明日一日化益之義相願ぬ、着後本堂の脇にて名号石の開眼有り、諸人群集誠ニ夥しき事也

とあり、無量光寺での教化は、『徳本行者全集』第二巻「関東摂化講中名號記　巻二十二」に「同月十九日相州当麻山無量光寺におゐて」とあり

一、大幅名号　講中百五人　　相州高座郡当麻村
　　世話人　安右衛門
　　八十八
　　藤兵衛
　　伴右衛門

一、大幅名号　講中百六十七人　同上溝村
　　世話人　源左衛門
　　長兵衛
　　藤　内
　　彦左衛門

一、大幅名号　講中百十一人　同所
　　世話人　甚左衛門
　　政右衛門

この記録からも、当地において徳本行者が無量光寺を拠点としていたことが判明するだけでなく、当麻村・上溝村の講中がいずれも百人を超えるものであり大幅名号を得ていたことも明らかである。ちなみに大幅名号は百人以上の講中に与えられるものであった。文化十四年の教化活動において、相模国徳本念仏講中に頒布された名号の大きさと講中の人数記したのが【表1】である。

表１　相模国における徳本念仏講

番号	名号の形式	講中人員数	村名	世話人	備考	名号受領地	現行地名
1	大	454	国分村近在村之国分村	久米蔵 幸助 良助 吉次郎		文化１４年（１８１７）３月４日～８日 上野国桐生町　浄運寺　於	海老名市国分
			上和泉村	平吉 佐兵衛	上今泉村か？		海老名市上今泉
			柏ヶ谷村	吉兵衛 此外余多略ス			海老名市柏ヶ谷村
2	大	234	高座郡遠藤村近村々	新兵衛 戸右衛門 利左衛門 清五郎			藤沢市遠藤
3	小		風祭大運寺講中	大運寺			
4	大	104	淘綾郡高麗寺村	庄兵衛 権左衛門 忠右衛門			中郡大磯町高麗
5	大	121	大住郡田村之内横村	四郎兵衛 久兵衛 武右衛門	横内村か？・渡し場		平塚市田村
6	大	139	戸田村或就院	弥右衛門 孫兵衛 忠蔵 久右衛門			厚木市戸田
7	大	103	同村福蔵院	又左衛門 常治郎 万右衛門			
8	大	95	大住郡八幡村	太郎兵衛 勘左衛門 伝右衛門			平塚市東八幡
9	大	223	高座郡蔵見村近在所々	大村　勉次郎 なにみ　善右衛門 倉見　専右衛門 宮原　常右衛門 朝か　清右衛門 小谷　十郎右衛門 大蔵　五左衛門			高座郡寒川町倉見
10	中	63	同門沢橋	直右衛門 定右衛門 清右衛門			海老名市門沢橋
11	大	397	高座郡河原口町 早川村近在廿一村	ミタ松　観長 早川　次郎右衛門 寺尾　藤左衛門 深谷山原　若松 中河内　勉左衛門 清兵衛			海老名市河原口 綾瀬市早川
12	大	132	高座郡用田村	勉兵衛 松右衛門 幸右衛門			藤沢市用田
13	大	138	高野郡星谷村	五郎左衛門 多右衛門	高座郡か？	永伝寺旦中（浅草）	座間市星谷
14	大	126	高座郡早川村	治郎右衛門		福厳寺（清水）	綾瀬市早川
15	大	541	愛甲郡熊坂村	庄兵衛 吉左衛門 波右衛門 要右衛門 文七 駿右衛門 文左衛門 政右衛門 半兵衛		文化１４年（１８１７）１０月 一行院　於	愛甲郡愛川町中津
16	大	114	高座郡勝坂村	喜右衛門 音右衛門 甚右衛門 大吉		文化１４年（１８１７）１１月１４日～１８日 武蔵鵜山（八王子）　大善寺　於	相模原市下溝（勝坂）
17	大	108	小山村下組	幸助 弥右衛門			相模原市小山
18	大	121	右同所上組	文右衛門 長統			相模原市小山
19	大	97	高座郡大槻下郷	佐兵衛 宗左衛門 伝右衛門 重左衛門			相模原市大島
20	大	101	同郡相原村	三右衛門 忠蔵 伴七			相模原市相原
21	大	105	右同所当麻田北分	重蔵 弥右衛門 吉左衛門 吉右衛門			相模原市当麻
22	大	112	右同断南分三原田尻	忠左衛門 太右衛門 甚五右衛門 庄兵衛			相模原市当麻
23	大	123	津久井郡又野村	半之丞 小八			津久井郡津久井町又野
24	大	129	同郡相原村森下	八右衛門 金左衛門 武右衛門			相模原市森下
25	大	117	右同断中村川根	点睛 市郎右衛門 利助 忠八			
26	大	120	右同所森下	平四郎 孫右衛門 壽右衛門			相模原市森下
27	大	127	右同郡筑郡下川尻原福	孫兵衛 万右衛門 亀八 喜兵衛	津久井郡か？		津久井郡城山町川尻
28	大	108	同所町谷本郷	丈七 藤左衛門			津久井郡城山町町屋
29	大	125	高座郡下磯部村	順光寺 庄兵衛 権右衛門			相模原市磯部
30	大	120	筑井郡中の村	弥右衛門 徳左衛門 仁兵衛 弥五助			津久井郡津久井町中野
31	大	105	同杉村	三右衛門 市左衛門			
32	大	126	同中沢村	甚右衛門 五郎右衛門 勘兵衛 平蔵			津久井郡城山町中沢
33	中	86	高座郡大槻村坂戸	半蔵 万吉 長左衛門 又四郎			相模原市大島

34	中	76	久保沢	七郎右衛門 嘉兵衛 茂右衛門 六右衛門			津久井郡城山町
35	中	94	同つくゐ郡下川尻 （津久井）	法善 喜平治 彦左衛門			津久井郡城山町川尻
36	中	83	つくゐ郡三井村	源右衛門 正兵衛			津久井郡津久井町三井
37	中	59	同上川尻畑久保	治左衛門 六左衛門 藤兵衛 正助			津久井郡城山町川尻
38	中	57	高座郡下橋本宿	金左衛門 勘助 与右衛門			相模原市橋本
39	小	35	つくゐ郡三井村	政次郎 孫蔵			津久井郡津久井町三井
40	大	105	高座郡当麻村	安右衛門 八十八 藤兵衛 伴右衛門		同年１１月１９日 相州当麻山　無量光寺　於	相模原市当麻
41	大	167	同上溝村	源左衛門 長兵衛 藤内 彦左衛門			相模原市上溝
42	大	111	同所	甚左衛門 政右衛門			相模原市上溝
43	大	138	高座郡新戸村	四郎兵衛 清治		同年１１月２１日 相州妻田　西福寺　於	相模原市新戸
44	大	108	筑井郡中沢	金八 勝七 金平			津久井郡城山町中沢
45	大	151	高座郡深見村	龍助 清左衛門 専蔵 助三郎 助之進			大和市深見
46	大	120	同郡上溝村	甚左衛門 新右衛門			相模原市上溝
47	大	101	高山村	庄右衛門 善蔵 善蔵			
48	大	110	愛甲郡山際村	平右衛門 小七			厚木市山際
49	大	105	金田村	喜代松 勘八			厚木市金田
50	中	52	下今泉村	与五右衛門 友八 七左衛門			秦野市今泉
51	大	126	高座郡田村瀬	勘左衛門 与右衛門 与七 勘七		同年１１月２３日～２５日 相州中原村　大松寺　於	平塚市田村
52	大	108	同国風村迎所	定右衛門 定八 清次兵衛			
53	大	106	同	藤内 藤吉			
54	大	125	同厚木村	助左衛門 三郎兵衛 長左衛門 喜松 善四郎 儀兵衛			厚木市元町
55	大	113	高座郡下九沢村	重蔵			相模原市下九沢
56	中	61	同田名村久所組	幸八 源之丞 茂八 専八 銀蔵			相模原市田名
57	中	86	大住郡田村	久四郎 市郎兵衛			平塚市田村
58	中	60	矢名村	丁春 吉左衛門			秦野市矢名
59	小	26	山西村梅沢	甚左衛門 勘兵衛 定右衛門 清次郎 善助			中郡二宮町山西
60	大	101	筑井郡三ヶ木村野尻	清内 九郎右衛門 嘉七		同年１１月２７日 同国狼煙　海宝寺　於	津久井郡津久井町三ヶ木野尻
61	大	104	同所新宿	市右衛門 伊右衛門 利右衛門			津久井郡津久井町三ヶ木新宿
62	大	103	同原谷戸	左治右衛門 六郎兵衛 三郎兵衛			津久井郡津久井町三ヶ木原替戸
63	大	168	鎌倉郡小菅谷村	友右衛門 専右衛門 与次右衛門 吉兵衛 忠右衛門			横浜市戸塚区小菅ヶ谷町
64	大	100	同所中村	清兵衛 彦太郎			横浜市戸塚区小菅ヶ谷町
65	大	111	御綾郡国府新宿	八郎右衛門 重郎左衛門 金左衛門 吉左衛門 長左衛門			中郡大磯町国府新宿
66	大	166	高座郡門沢橋村	権兵衛 善吉 浅右衛門 治右衛門 善右衛門			海老名市門沢橋
67	中	63	芥沢村	織右衛門 善兵衛			
68	中	54	鎌倉郡上保野村	左左衛門 万右衛門	鎌倉郡上俣野村か？		横浜市戸塚区俣野町
69	中	48	高座郡西保野村	久米右衛門 市郎右衛門	高座郡西俣野村か？		藤沢市西俣野
70	小	35	同土屋村	八郎兵衛 富三郎			平塚市土屋
71	小	20	同上芹沢村山入	弥兵衛			茅ヶ崎市芹沢
72	小	30	鎌倉郡原宿大運寺	三郎兵衛 藤兵衛			横浜市戸塚区原宿町
73	小	21	御綾郡黒谷村	中蔵 忠吉 富右衛門	御綾郡黒岩村か？		中郡大磯町黒岩
74	大		戸塚宿	清涼（源）院	但し唐紙壱枚	同月３０日～１２月５日 神奈川観福寺　於	横浜市戸塚区戸塚町
75	大	287	高座郡赤羽根村	吉郎左衛門 鎌右衛門			茅ヶ崎市赤羽根

76	大	120	鎌倉郡中田村	誉右衛門 治右衛門			横浜市戸塚区中田町
77	大	108	高座郡西深谷村	与次右衛門 次郎左衛門			綾瀬市深谷
78	中	90	同赤羽村	兵左衛門 田右衛門 与右衛門 又兵衛 六左衛門 太郎右衛門			茅ヶ崎市赤羽根
79	中	86	同本村	惣左衛門 定右衛門			鎌倉市岡本か？
80	大	124	鎌倉郡岡津	西林寺			横浜市戸塚区岡津町
81	大	200	高座郡南湖	本陣　佐藤清左衛門 同　五兵衛 飯田市郎左衛門 大貫栄二郎		同年１２月１０日～ 帰府後　一行院　於	茅ヶ崎市南湖
82	大	101	愛甲郡恩名村	作右衛門 卯兵衛 三郎右衛門	恩名村か？		厚木市恩名
83	大	138	愛甲郡船子村	甚兵衛 長左衛門 藤右衛門			厚木市船子
84	大	145	同温泉村	新左衛門 平七	温水村か？		厚木市温水
85	大	136	武州愛甲郡林村	七郎右衛門 幸七 市兵衛	相州愛甲郡林村か？		厚木市林
86	大	258	高座郡赤羽根村	佐右衛門 喜兵衛 治兵衛			茅ヶ崎市赤羽根
87	大	240	大住郡下糟屋村	平右衛門 金兵衛			伊勢原市下粕谷
88	大	111	愛甲郡下荻田村	藤七 直右衛門 弥三郎			厚木市荻田
89	大	127	同所中郷	伝兵衛 半右衛門			
90	大	107	同所上郷	源四郎 三右衛門			
91	大	118	愛甲郡厚木村天王町	理左衛門 平八 伊八 太郎兵衛			厚木市元町
92	大	105	大住郡下槻村	清右衛門 安兵衛			平塚市下島
93	大	107	同沼目村	久左衛門 藤右衛門			伊勢原市沼目
94	中	66	高座郡渕の辺村	万右衛門			相模原市淵野辺
95	小	50	高座郡若木村	太兵衛 善助			
96	大	139	大住郡新上村	市郎兵衛 重右衛門			
97	中	95	町屋村	梅雲寺 治左衛門 八郎右衛門			茅ヶ崎市町屋
98	大	108	下谷村	元★ 助左衛門 三右衛門			伊勢原市下谷
99	大	102	丸槻村	治右衛門 森右衛門 彦兵衛 和助			平塚市岡崎
100	大	117	下小鶴巣村	九兵衛 市兵衛 幸右衛門			平塚市小鶴巣
101	中	64	千束村	茂右衛門 長左衛門			藤沢市高倉
102	大	100	鎌倉郡名瀬村	成円 正兵衛 善五郎			横浜市戸塚区名瀬
103	大	106	堀河村	久左衛門 清蔵 伊左衛門 伊右衛門			
104	大	120	中瀬村	治郎右衛門 半左衛門 甚右衛門 七左衛門 定右衛門 六郎右衛門			高座郡寒川町中瀬
105	大	111	同矢部町	弥惣次 藤四郎 武左衛門			横浜市戸塚区矢部町
106	大	171	相原村	忠蔵 重蔵 行順 市郎右衛門 八右衛門			相模原市相原
107	大	106	上倉田村	半左衛門 太郎右衛門			横浜市戸塚区上倉田町
108	大	115	大住郡	大宝寺 喜左衛門 与兵衛 金右衛門			
109	大	127	石田村	佐吉 治兵衛			伊勢原市石田
110	中	62	坂本村	正右衛門 万右衛門 兄次郎			伊勢原市
111	小	28	三浦郡久比里村	助四郎			

八王子滝山大善寺、相州当麻山無量光寺（現　相模原市）、相州妻田西福寺（現　厚木市）、相州中原大松寺、を中心にした相模の国での教化活動の拠点において、滝山大善寺では愛甲郡熊坂村　講員五百四十一名を筆頭に高座郡上溝村百六十七名、同郡深見村百五十一名をはじめとして各地で百名を越える十六の講中が、当麻山無量光寺では上溝村をはじめとして二つの講中が、西福寺では深見村をはじめとして六つの講中が、中原大松寺では高座郡田村滝をはじめとして四つの講中が百名を越すなど、相模の国において徳本念仏講が隆盛をきわめていたことがこの【表1】からも明らかである。

さらに無量光寺の次の逗留の地である厚木の妻田西福寺に上溝の講中が追いかけて行く形で名号を拝受しに行っていることがわかる。

一、大幅名号　講中百弐十人　同国同郡上溝村
世話人　甚左衛門
新右衛門

相模の国で徳本念仏講が際立った展開を見せている旧中郡地帯、なかでも徳川家康の鷹狩りの休息地となった中原御殿脇の中原大松寺は、徳本教化活動の一大拠点となったところであるが、その大松寺にも下九沢村から名号を拝受しに行っていることがわかる。

一、大幅名号　講中百十三人　同高座郡下九沢村
世話人　重　蔵

この文化十四年の教化活動において念仏講が活性化されたとみえて、同地域の淵野辺村ではわざわざ江戸の一行院に出向いて徳本より六字名号を拝受している。

一、中幅名号　講中六十六人　相州高座郡渕の辺村
世話人　万右衛門

次に相模原市域の徳本六字名号塔を表に表わしたのが【表2】である。【表2】をもとに所在地と前述した【表1】より相模原市域の念仏講を地図に落としたのが《図1》である（参考として町田市域の徳本念仏講と六字名号塔も地図に落としてある）

そこで筆者は相模原市全域の徳本六字名号塔の所在地、及び地域の講集団との関わりについて調査を行なった。

はじめに所在地に注目すると、相模原市内のうち3の東淵野辺、龍像寺以外は相原・橋本・下九

表２　相模原市域の徳本六字名号塔

	所在地	造立年月日	西暦	銘文	造立者	寸法（ｃｍ）	備考
1	相原6－18－23	文政癸歳□月穀日	1818	南無阿弥陀佛　徳本　花押	黙照不墨石上鳥屋幸右衛門	110×59	台座に當村講中
2	橋本5－39　香福寺	文政二亥卯	1819	南無阿弥陀佛　徳本　花押	社中造立	144×61	
3	東淵野辺3丁目　龍像寺	文政元年戊寅年十一月吉日	1818	南無阿弥陀佛　徳本　花押	渕野辺邑徳本念仏講中	75×61	
4	大島1082付近　笹野氏宅前	文政三辰年	1820	南無阿弥陀佛　徳本　花押		84×46.5	大山道標他9基
5	大島2250　日々神社	文政三辰年三月	1820	南無阿弥陀佛　徳本　花押	下田名講中	80×60	左はしのや（併用道標） 元　大島2692にあった
6	下九沢1996			□法観世音菩薩 南無阿弥陀佛 得久勢至菩薩		43×23	
7	下九沢549　山口氏宅内			南無阿弥陀佛　徳本　花押		113×40	台座に念佛講中
8	大島756　長徳寺	文政二己卯年九月六日	1819	南無阿弥陀佛　徳本　花押	講中	182×63	元　下九沢2917にあった
9	田名1412			南無阿弥陀佛　徳本　花押		80×38	
10	田名5640　南光寺	文政五壬午年三月吉日	1822	剥離のため南のみ判読可		102×45	台座に陽原　望地　講中
11	田名8323	昭和四十七年八月日再建	1972	南無阿弥陀佛　徳本　花押	南光廿六世満□代	182×39	
12	当麻578　無量光寺	文化十四年十月九日	1817	南無阿弥陀佛　徳本　花押		166×78	裏に五十二世他阿上人の銘
13	下溝寺古山　共同墓地内	時于文政四辛巳年三月吉祥日	1821	南無阿弥陀佛　徳本　花押		102×38	折れている

西海賢二『漂泊の聖たち』104頁、相模原市立博物館学芸員　加藤隆志氏の御教示、ならびに筆者調査資料により作成

図1　相模原・町田市域の徳本六字名号塔並び徳本念仏講

沢・大島・田名・下溝・当麻の旧大山街道沿いの村々に造立されており、特に田名に多く田名・当麻に集中している。

次に六字名号の造立傾向をみると、12の当麻無量光寺の文化十四年に造立されたものを初見として、田名の昭和四十七年に再建されたものまで十三基が確認される。なかでも文政元年から文政五年にかけて集中して造立されており、1の相原と3の東淵野辺のものは徳本の入寂にかかわるものであり、4の大島と5の大島は徳本の三回忌に造立されたものと思われ、当市域のものは12の無量光寺以外はいずれも徳本の死後に造立されたものであるため、信仰集団としての徳本講中のありかたが、造立傾向をみせているものと思われる。それが造立者の傾向にも読み取ることが可能と思われる。

市域の中で徳本の念仏講中らの手によるものは1・2・3・5・7・8・12の七基である。さらに本市域の徳本六字名号の特徴としてあげられるのが六字名号塔として造立されるだけでなく他の信仰集団とともに造立されたものが確認されることである。それは当地域の徳本六字名号塔の所在地の分布状況でも一部紹介したように、市内を縦貫する脇往還的な大山街道に関わる道標を兼ねた、いわゆる併用道標5及び地域の女人講中とともに造立した10などもある。特に10の田名南光寺にかかわる徳本六字名号塔は、当地域の観音講を中心とした女人講と、他の講集団とのかかわりが密接であったことが同境内に造立されている石造物の銘文からも明らかである。その数例を以下に紹介する。

①二十三夜供養塔

二十三夜供　　文政九戌天　　相月吉旦

陽原善女人

②念仏供養塔

（正面右側面）
正徳二仁辰稔十月念四月

（正面左側面）
相州高座郡澁谷荘田名郷陽原村
念佛講結衆之善女人等現受無
此樂後生清浄土□矣云爾

③二十三夜供養塔

（正面）
二十三夜供

（正面右側面）
安永九庚子歳

（台座正面）
男女講中

④念仏供養塔

（正面右側面）
念佛供養塔

（正面左側面）
天明五乙巳歳
十一月吉祥日

⑤百万遍供養塔

百万遍供養塔
安政四丁巳年四月四日
施主金井良兵衛

⑥二十三夜供養塔

二十三夜供養塔　安政□年六月
観音講中

⑦百万遍供養塔（併用道標）

（正面）
百万遍供

（正面右側面）
右　大山道
六月　日
相州高座郡

（正面左側面）
左　たいま道

（台座）
陽原　望地念佛講中

さらに十三基の徳本六字名号塔にかかわる地域において念仏講が継続されているか追跡調査を試みたが、つい数年前までは存続していたがほぼ消滅状況であった。

四　武相の徳本六字名号塔をめぐって

武蔵・相模の両相原村の念仏講と徳本六字名号塔ならびに相模原市域における徳本六字名号塔について紹介してきたが、次に武相における徳本の教化活動とそれにともなう六字名号塔の造立経緯について紹介する。

武相における徳本六字名号塔の造立傾向は、前掲した西海の『漂泊の聖たち』によれば、文化十二年（一八一五）を初見として文政元年から三年の間に集中して多く造立されていることがわかる【表3】、造立傾向の要因を考えてみると、文政元年（一八一八）に多いのはいうまでもなく徳本行者の入寂にかかわって造立されたものであり、文政二年は一周忌、文政三年は三周忌にあたって造立されていることがわかる。他に特徴的なものとして天保二年（一八三一）の十三回忌に関連して造立されたもの、大正期のものはいずれも徳本歿後百回忌法要及び旧中郡を中心に展開した大会（オオガイ）念仏の連合体としての弛緩を強制するために造立されたものであることが読み取れる。

次に地域的な分布状況をみると相模原市・横浜市・平塚市が群を抜いて多いことはすでに紹介したが、造立された村々あるいは寺縁などに注目すると大きく次の二点に関わっていることが明らかとなった。

①浄土宗の本末関係にある寺々の関係

表3　武相の徳本六字名号塔（現　神奈川県と明治22年以前の神奈川県を含む）

	茅ケ崎市	藤沢市	寒川町	海老名市	大和市	綾瀬市	相模原市	横浜市	鎌倉市	逗子市	葉山町	三浦市	横須賀市	平塚市	大磯町	二宮町	小田原市	箱根町	真鶴町	湯河原町	南足柄市	中井町	伊勢原市	厚木市	秦野市	愛川町	相模湖町	津久井町	城山町	川崎市	
文化12								1			1		1																1	4
13														1																	1
14				1		1	1	1						2			1					1									8
15																		1						1							2
文政元			1					2	2	1						1	1					2		1							11
2				1				2	1					1		2			1						1	2	1	1			13
3	2							2						2		1												1			11
4	1		1					1																				1	1		5
5	1							1	1	1																			1		4
6														1															1		2
7									1	1				1			2														4
8				1																											1
9												1																			1
10										1		2				1							1		1						6
11									1														1								2
12										1										1											2
13									1											2					1						4
天保2														1			1					1									3
3									1					2																	3
4										1	1												1								3
5																	1				1										2
7												1																			1
9														1																	1
10														1	1																2
11																									1						1
12														1											1						2
天保期								1																							1
弘化4																									1						1
嘉永元														1																	1
2																									1						1
3														1									1								2
5																	1														1
安政3											1																				1
4								1																							1
6		1													1						1										3
文久元																							1								1
慶応2													2																		1
3														1										1							2
明治								1																							1
大正														2																	2
昭和47							1																								1
なし					1		3	6			1	3		2	2	1	1	1				1	1	1	1	1	1			1	27
	4	2	2	2	2	1	13	16	6	3	3	7	3	21	5	5	8	2	1	3	2	5	6	4	8	3	2	3	5	1	146

西海賢二『漂泊の聖たち』103頁～110頁及び筆者調査資料により作成

②すべてではないがその多くが旗本領を中心とした支配体系下の村々に造立されている。

ただし特定の地域に造立が少ないからといって徳本念仏講が地域に進展していなかったというのではなく、特に文化十二・十三・十四・文政元・二・三・四・五までに造立されたものの多くには、村連合体として供養塔を造立している傾向が大である。

ここでいう村連合とはすでに川村優氏の上総・下総を中心として、久留島浩氏の甲斐国を中心としての研究によってその詳細が明らかになりつつあるが、文化初年に関八州の取締り強化のために幕府によって作られた関東御取締出役の傘下のもと作られた改革組合の組合単位の村々がほぼこれらにあたっている。

特に特徴的なのが、武相においては徳本行者が没した文政元年（一八一八）十月六日以降に造立がピークをみせることである。なかでも前述した村々の連合体として造立した一例が、『大和市文化財調査報告書第七十六集　石造物　石に刻まれた庶民のねがい』に紹介されている大和市深見　仏導寺境内の六字名号塔である。小川直之氏の解説にも六字名号の銘文が、「文政元年寅ノ九月吉日　相州高座郡深見村名主　小林源内　山崎半之丞　中丸龍助」とあることが紹介されている。

文政元年に建立されたものは、この他に前掲書『漂泊の聖たち』の中に、藤沢市遠藤、相模原市淵野辺　龍像寺、横浜市泉区吉田　宝蔵院、鎌倉市　英勝寺、大磯町　大運寺、中井町田中、中井町半分形、厚木市金田　建徳寺にあることが紹介されている。この中で建立月日が最も早期なものは、横浜市泉区吉田の文政元年七月十五日のものであり、同年九月のものは藤沢市遠藤、鎌倉市英勝寺にある。

さて前掲した仏導寺境内の徳本六字名号塔には深見村の三人の名主の名前をはじめ仏導寺の末寺である観音寺、清雲院、浄照院、安楽寺、露心寺の五ケ寺の名前がある。さらに深見村、瀬谷村、鶴間村、上河井村などの村名が刻まれ、さらに念仏講中や二百人を超える人名も刻まれている。ちなみに十か村以上の村々の連合体で造立された相模国内の六字名号塔を紹介すれば、

①藤沢市円行	清雲寺跡	安政六年	十七か村
②藤沢市遠藤	宝泉寺	文政元年	十六か村
③寒川町一宮	南泉寺	文政四年	十か村
④綾瀬市上土棚	蓮光寺	文化十四年	三十か村
⑤鎌倉市岩瀬	大長寺	文政元年	十四か村
⑥平塚市中原	大松寺	文化十三年	九十か村
⑦平塚市徳延	バス停前	天保三年	二十九か村
⑧南足柄市関本	竜福寺	天保五年	三十か村

の通りである。こうした銘文あるいは造立傾向からは徳本念仏講に寄せる信仰がいかに浸透していたかがうかがえる。

先にも紹介したが、文化十四年の八王子・相模教化において徳本行者の教化の地ともなった八王子の滝山大善寺では、

一、同月十五日より十八日迄、武州八王寺宿於大善寺に化益有之ける、
　十五日
一、念仏会勧誡三座有之、当山八檀林也、境内も広し、本堂も広けれ

とも参詣の諸人充満しける事、前に一倍して大群集なり、

十六日

一、念仏会勧誡三座、遠近老若男女群集して昨日よりも多く参詣有る之けり、

十七日

一、右同断、諸人参詣十六日より八少し劣りける、夕座早而回向あり、抑行者於何地にも勧誡の度毎に、六字分明之義を教示をらるる事至て深切也、先念仏開闢の始に三四称八一字ツヽ切て唱へ、猶又勧誡の時八てん一字も切りて十念唱へ、次ニ二字ツヽ十念唱へ、終に八鉦を打唱る事、至而叮嚀ニ被致教示　其言は別記有り、然に行者不参以前八於何地只〻訛略之念仏のミなり、然八一度参られての後八貴賤都鄙を論せす老若男女をいとわす、悉く皆六字分明ニ帰す、当山なとも初て八多分訛略有りしに二日目より八、ミな分明になりぬ、当寺に限らす大名旗本等何も化益におゐて八皆以て如斯、誠に有かたき例しなり、

十八日

一、早朝門にて名号石開眼、諸人群集する事夥しく、夫より直様当所世話人阿波屋与一方ニて斎の供養に招請に被参、其所に於て名号石開眼等有て、程なく大善寺へ帰寺、諸人の参詣夥しけれハ十念両度、日課百辺ツヽ授与されける、但し八ツ時より於本堂剃髪之作法、八王子其外近在の老若男女八百五十五人也、抑当山の御丈室八便蓮社速誉裕海和尚とて殊の外御信心も厚く、深く行者ニ御帰依有り、滞留中ニ而も万事御叮嚀之至、申尽し難き事になん侍りぬ、

（『徳本行者全集』一巻　一九三頁～一九四頁）

と三日間の留錫においていかに多くの人々が徳本行者のもとに参集していたかが詳細に記録されている。この三日間の留錫において八王子宿周辺の村々には

大幅名号　三十二幅　講員数　四〇五四人
中幅名号　二十七幅　講員数　二〇七一人
小幅名号　二十三幅　講員数　七二七人

（『徳本行者全集』二巻より作成）

合計八十二幅、講員数六八五二人に頒布されていたことがわかる。これをしてもわずか三日間にこれだけ多くの人々が徳本のもとに参集していたことは驚くべきことである。この大善寺における留錫に関わり徳本六字名号塔が造立されていったことが調査によっても明らかとなった。以下に現在確認される八王子市内・町田市内の徳本六字名号塔を紹介する。

①八王子市東浅川町　原宿会館内

（正面）

南無阿弥陀佛　徳本　（花押）

（裏）

文政四巳十月日

惣講中

※脇に木食観正碑あり

②　八王子市並木町　曹洞宗　祥雲山　長安寺

（正面）
南無阿弥陀佛　徳本　（花押）
（裏）
文化十四年丑十一月
新地
関戸　講中
※年号の四は私年号が用いられている。

③八王子市千人町　曹洞宗　興岳寺

徳本六字名号塔があったが、現在宗派が違うということもあり、十五年ほど前に八王子市郷土資料館に移動した。

④八王子市郷土資料館前

（正面）
南無阿弥陀佛　徳本　（花押）
（右側面）
文政十丁亥十月吉日
※②の長安寺のものと書体が似ている。

⑤町田市矢部町　箭柄八幡宮付近三叉路

（正面）
南無阿弥陀佛　徳本　（花押）
（右側面）
名蓮社號譽上人稱阿弥陀佛
（左側面）
天保八丁酉十一月六日
（台座正面）
當所念仏講中
（台座右側面）
金百五十疋
伏見

⑥町田市図師町　曹洞宗　真峰山　円福寺

（正面）
南無阿弥陀佛　徳本　（花押）
（右側面）
王艶寿童大姉　當村　川合福美　他七名
（左側面）
文政五壬午歳二月吉辰

⑦町田市常磐町　日枝神社（持宝院）前・常盤不動尊

（正面）
南無阿弥陀佛　徳本　（花押）

（右側面）
願主　當所念佛講中二拾人
（左側面）
于時文政六癸未歳
中□佛祥日建立之

※日枝神社は明治三十九年（一九〇六）から平成十一年（一九九九）まで上小山田町の神明社に合祀されており、平成十一年に建替えられた。この経緯の詳細については西海が「ヒキミヤ考―悲願九十三年―」（コロス八十一号　二〇〇〇）に詳細な報告をしている。

⑧町田市上小山田町　神明社前

（正面）
南無阿弥陀佛　徳本（花押）
（台座正面）
念佛講中
（台座右側面）
武州多摩郡
上小山田町
平
文政七甲申年九月吉祥日
（台座左側面）
世話人　牧野浅右衛門

このように教化活動に伴う徳本六字名号の拝受とその後の講集団の育成過程においてこうした六字名号塔の造立が行われていったことを石造物に刻まれた銘文からも読み取ることができる。

ちなみに前掲した町田市・相模原市の相原村に造立されている①、②の銘文にある當村中・當村講中とあるのは念仏講中であることはいうまでもない。この両地区には現在も念仏講を媒介とした「ニワ」と呼ばれる地縁集団が存在しており、この集団は信仰集団としての機能だけではなく冠婚葬祭を中心とした集団でもあり、まさに徳本念仏講の残影が今日も息づいていることを確認できるのである。

付記　本稿は渡辺みゆきの責任のもとに作成されたものである。

人文学部日本文化学科
＊人文学部日本文化学科　平成十年度卒業

参考　町田市内の徳本念仏講
（文化 14 年 11 月 14 日～）

番号	名号の形式	講中人員	村名	世話人	備考	名号受領地	現行地名
1	大	100	武州木曽村	忠兵衛 段助 八郎右衛門 三右衛門		文化14年（1817）11月14日 ～18日 武州滝山大善寺　於	町田市木曽
2	大	120	武州小山村上組	伊兵衛 佐五右衛門 才兵衛 十郎兵衛			町田市小山町
3	大	105	武州小山村下組	兵助 新之丞			町田市小山町
4	大	157	武州多摩郡相原村	安左衛門 善蔵 甚右衛門			町田市相原町
5	大	379	武州下相原中村	亀太郎 与右衛門 友七 儀左衛門			町田市相原町
6	大	129	武州下相原和田	仁兵衛 丈七			町田市相原町
7	大	108	武州中相原	平左衛門 藤八 六兵衛 文次郎			町田市相原町
8	小	35	武州小川村	重左衛門			町田市小川町
9	小	26	武州小山田村	浅右衛門 勘右衛門			町田市上山田町
10	小	44	武州図師村	兵右衛門			町田市図師町
11	小	17	武州奈良村	彦兵衛			町田市奈良町
12	小	37	武州原町田村	武兵衛			町田市原町田
13	小	20	武州小川村	吉右衛門			町田市小川村
14	小	31	武州かね森村	市郎兵衛			町田市金森
15	小	26	武州かね森村	吉兵衛			町田市金森
16	中	54	武州山崎村	五郎左衛門 周弥			町田市山崎町
17	小	43	武州根岸村	佐左衛門 弥左衛門			町田市根岸町
18	中	51	武州矢部村	権蔵 元右衛門		12月10日～ 江戸　一行院　於	町田市矢部町
19	小		武州小山田村	孫右衛門			町田市小山田町
20	小	28	武州小野路村	幸右衛門 与市			町田市小野路町
21	大	106	武州本町田村	久兵衛 伊兵衛			町田市本町田

『徳本行者全集』第２巻　「講中名號記　弐」より抜粋作成